

家族のミライ・ミライの家族

原 俊彦 (札幌市立大学・名誉教授)

現代小説に見る家族のミライ

ここでは三編の現代小説を取り上げ、そこに描かれた家族のミライについて考察する。まず『百年法』(山田宗樹 2012)では、レトロウイルスを利用した不老技術“HAVI”により不老不死が実現するが、処置後100年で安楽死を義務付ける法律“生存制限法”が施行され、寿命が社会的に管理される世界が描かれている。平均寿命が百歳に近づき世代交代の遅延やライフサイクルの延伸により家族の維持・形成は困難となり家族は消滅に向かう。『LOVE&SYSTEMS』(中島たい子 2012)では、結婚の国家管理が進み、国家がパートナー選択を行い家族形成を促す社会と、結婚制度は廃止され子育てが全面的に社会化する社会が対置されている。『消滅世界』(村田沙耶香 2015)では男女の「セックス」から子どもが生まれるということはなくなり、生殖・出産・子育てのすべてが社会化した世界が描かれ、そこでは家族は集団化し、個人間の関係に基づく家族は消滅する。これらの家族のミライにリアリティはあるのだろうか？。

超高齢・人口減少に向かう世界

日本はもとより世界全体が超高齢・人口減少社会に向かっていることは間違いようもない現実である。国連の世界推計 2019 によれば、世界全体の合計出生率はピーク時(1960-65年)の5.02人から直近(2010-15年)の2.47人まで低下し、すでに世界の半数以上の国で合計出生率は置換水準(約2人)以下となり、もはや低出生力は日本の専売特許ではなくなっている。一方、世界の平均寿命は、かつての47.0年(1950-55年)から72.3年(2015-20年)まで延伸している。このため、この国連推計 2019 では先行する日本に続き、EU 各国、中国など世界の大半の国々が2050年までに超高齢・人口減少社会に突入すると推計している。

政策面から展望する家族のミライ

寿命の社会的管理については、現在のところ平均寿命の延伸を抑えるような政策的対応はない。しかし、平均寿命90歳・高齢化率40%という避けがたい未来を想定した場合、世代交代の遅延やライフサイクルの延伸が進むことは避け難く、従来の高齢者福祉制度のスキーム(世代間扶養)に代わり、世代や年齢の枠を超えた個人ベースの労働・所得・税・福祉サービスの再分配システムを構築する必要があり、世代間・相互扶養の単位としての家族は存在理由を失って行くだろう。結婚の社会的管理については、ワークライフバランスの改善、ジェンダー平等の推進、正規・非正規の雇用格差の是正、保育・教育の無償化など、政府の家族形成支援策はまだ十分とはいえない。しかし、たとえどのような支援を行おうと、個人が希望するタイミングで相互に納得の行くパートナーに巡り会い、結婚・出産し幸せに暮らしてゆくことは容易ではない。このため、パートナー選択に必要な情報を政府がビッグデータとして一元管理し、AIなど通じて提供するようになる可能性は十分にあると思われる。当初は単なる情報提供に過ぎないとしても、このようなマッチングシステムに対する依存性が高まれば、結婚はもとより結婚後の生活も政府が支援・管理するようになるだろう。生殖・出産・子育ての社会的管理については、急速に発展し始めた生殖補助医療(ART)がさらに普及し高年齢出産の安全性が保証されるとともに、出生間隔の短縮(多胎児出産、代理母出産、人工胎盤の利用)も可能となるだろう。あるいは卵子の冷凍保存・解凍・体外受精などの利用が一般化すれば、出生タイミングをライフコース上の任意の時点(未来)にシフトさせることも考えられる。このような社会では『セックス』は必要とされず、むしろ忌避されるとともに再生産の基本単位としての家族は意味を失うだろう。

ミライの家族はどのようなものになるのか

このような社会では、我々が知っている意味での家族は消滅し、社会と個人が直接繋がる社会システムとなるだろう。それはこれまでの人類社会よりは蟻や蜂などの社会性昆虫に近いものとなり、現時点からみれば奇怪で全体主義的な印象は免れない。しかし個人の自由を可能な限り保障する方向で進化し、やがて社会全体が1つの巨大な家族になると考えれば、これがミライの家族の姿なのではないかと思う。

(キーワード:長寿化、晩婚化、少子化)